

# 陸地測量部機関誌に残る 柴崎測量官の報告文を読む

(社) 日本測量協会 瀬戸島 政博

## はじめに

劔岳およびその周辺の測量を終えた後の柴崎測量官(柴崎芳太郎(1876(明治9)～1938(昭和13))の仕事について調べていた際<sup>1)</sup>、陸地測量部の機関誌に劔岳登頂の経緯、その山頂で収集した錫杖・鉄剣などに関する報告文や測量作業で赴いた東北・北海道・岐阜県・千島択捉島の地誌・風土・文化などをまとめた報告文があることに気づいた(表-1)。執筆時期は、1908(明治41)年から1916(大正5)年までの間に限られ、柴崎測量官が東北の三等三角測量、北海道の二等三角測量、愛知三重岐阜滋賀の二三等三角改測、千島択捉島の一等三角測量に従事していた時期であった。この時期以降は満洲・シベリア・台湾での外邦測量を担うため、このような報告文は見出せない。

また、この時代は陸地測量部の杉山正治<sup>2)</sup>がドイツ留学から帰朝(明治39年)した直後で、『三角測量方式草案』の抜本的な改定(明治39年12月から着手)を進めていた時代でもあり、ドイツから直輸入した理論の適用による不都合や課題を克服しながら『三角測量実行法』の完成に注力していた<sup>3)</sup>。

このように、わが国の測量体系が整備されていく中で、柴崎芳太郎も測量官として本務である測量作業の遂行に多忙な日々を過ごしていたにも拘らず、測量作業で赴いた土地の地誌や風土・文化などをまとめた報告文を数多く執筆し、陸地測量部の機関誌(『三五会会報』、『三交会誌』)に掲載していた<sup>4)</sup>。

ここでは、陸地測量部の機関誌に残る柴崎測量官の報告文とそこから推測できることなどをご紹介します。

## 1. 『劔山攀登冒険譚』をめぐる波紋

1907(明治40)年8月5～6日に『劔山攀登冒険譚(上)』

表-1 陸地測量部の機関誌に残る柴崎測量官の報告文

西 暦	和 暦	表 題
1907	明治40	『雑録』 <sup>6)</sup> (記者による談話の聞き書き)
1908	明治41	『出張地ニ於ケル見聞ニ就テ』 <sup>8)</sup>
1909	明治42	『劔山ニテ獲タル錫杖ニ就テノ考證』 <sup>13)</sup> 『院内の銀山に就て』 <sup>17)</sup>
1913	大正2	『「アイヌ」ノ伝説』 <sup>19)</sup>
1914	大正3	『関ヶ原の古戦場』 <sup>21)</sup>
1915	大正4	『関ヶ原の古戦場続き』 <sup>22)</sup> 『千島択捉ノ近状』 <sup>25)</sup>
1916	大正5	『千島択捉ノ近状続き』 <sup>26)</sup>

と題した記事が富山日報の紙上に載った<sup>5)</sup>。参謀本部陸地測量部測量官の談話という形の取材記事である。

『雑録』<sup>6)</sup>は三五会会報第17号(10月22日発行)に掲載されたもので、その冒頭には「富山縣下へ出張の某測量手より同縣下に於て発行する新聞紙より抜萃して送られたれば参考の爲め左に之を記録す(参謀本部陸地測量官の談)」と書かれている。この文章は新聞記者による談話の聞き書きで、ある意味での報道記録である。この報告文の出典は、先ほどの富山日報に掲載された記事である。そして、この文章は、山岳3年3号に『越中劔岳先登記』と題して掲載され、現在でも岩波文庫『山の旅 明治・大正篇』(近藤信行編)に収録されている<sup>7)</sup>。

『雑録』での記述内容をめぐり陸地測量部あるいは柴崎測量官が所属していた三角科において物議を醸していたことが、三五会会報第21号(1908(明治41)年3月)に掲載された『出張地ニ於ケル見聞ニ就テ』<sup>8)</sup>によって窺い知れる。この報告文の中で柴崎測量官は次のような2点を強調している。

①一つは艱難辛苦の末の献身的な国家事業を広く一般地方人に知らしめるためと考え、記者らの取材に応じたが、自分の意思を十分に発表できず、自分の思う十分の一も新聞紙上に書き残せなかったことを挙げ、未熟な自己を

反省している。裏を返せば、このようなことを会報に書かざるを得ないほどの立場に置かれていたことを知りえる。

②二つ目は立山温泉において非常に冷遇を受けたことについては、自分の懐具合でそのような冷遇を受けたような疑念を持たれることは誠に残念であり、他に深い原因(砂防工事のため県職員の事務所や湯治客での混雑)があったことを説明したいと記している。

このような二点から、陸地測量部という組織内で苦悶する若き測量官の姿が浮き彫りにされる。

## 2. 劔岳登頂をめぐる論争

1908(明治41)に日本山岳会(当時は山岳会)の会報「山岳」3年3号に『越中劔岳先登記』として柴崎芳太郎の名前で掲載され、これが後に大きな波紋となった。

と言うのも柴崎測量隊が劔岳に登頂した2年後に登頂した吉田孫四郎らは、この『越中劔岳先登記』を拠り所として同一の登頂ルートを跋涉した。その結果、柴崎測量隊による劔岳登頂に疑義のあることを『山岳』5年1号(1910(明治43)年)に掲載した『越中劔岳』<sup>9)</sup>の餘記「柴崎測量員登山の眞偽」に記した。その根拠の一つに山頂に設置した規標の材質にあった。『越中劔岳先登記』では、4本の木材を接ぎ合わせて6尺位の柱1本として規標としたと記されていたが、吉田らが登頂して確認したのは1本の自然木の規標であった(写真-1)<sup>10)</sup>。また、柴崎測量隊の一員として劔岳登頂をした山案内人の談によれば、第1回、第2回の登頂とも柴崎測量官は登頂に参加していなかったと語っている点も根拠としている。その後、表-2のように柴崎測量隊の劔岳登頂についてはしばしば日本山岳会会報などで話題となってきた。

それに対して、柴崎芳太郎は山岳6年1号(1911(明治44)年)に『本誌五年第一號所載劔嶽登山の記事に就て』<sup>11)</sup>と題する報告文を掲載し、その中で、建標にあたって数本の木片を繋ぎ合わせたというのは誤伝であり、さらに第1回登頂は生田測夫で測量上の判定のため登頂したこと、第2回登頂は柴崎測量官が木山測夫らを率いて四等三角点(文中では四號三角點)を建標することの決定をしたと記して



写真-1 論争の主因となった劔岳に設置された規標<sup>10)</sup>

表-2 主な柴崎測量隊の劔岳登頂をめぐる論争

牛山記者取材	1907	「劔山攀登冒險譚」(2回) 富山日報
某測量手	1907	「雑録」三五会会報第17号
柴崎芳太郎	1908	「越中劔岳先登記」山岳3-3
柴崎芳太郎	1908	「出張地ニ於ケル見聞ニ就テ」三五会会報第21号
吉田孫四郎	1910	「越中劔岳」山岳5-1
柴崎芳太郎	1911	本誌五年の第一號所載劔嶽登山の記事に就て山岳6-1
松村 寿	1961	劔岳先踏前後2 山書研究7
柴崎芳博	1980	「劔岳登頂をめぐる」山岳75
柴崎芳太郎	2003	「越中劔岳先登記」岩波文庫「山の旅」収録
五十嶋一晃	2008	「明治40年柴崎測量官の劔岳登頂日」山755
五十嶋一晃	2008	「劔岳をめぐる謎や疑問を追う」山岳103

いる。

以上のように、新聞取材による談話であったため誤伝なども生じる結果となり、その反証と説明に苦悶する柴崎測量官の姿がこれらの報告文から読み取れる。このような論争もあったが、現在では「四等規標高程手簿」の記載から柴崎測量官の劔岳登頂日は1907(明治40)年7月28日に確定されている<sup>12)</sup>。

## 3. 度重なる考古学遺物の発見者

三五会会報第33号(1909(明治42)年)に柴崎芳太郎の名前で『劔山ニテ獲タル錫杖ニ就テノ考證』<sup>13)</sup>と題する報告文(総会での報告文)が掲載されている。

この報告文の文末近くに、これまであまり語られてこなかった柴崎測量官による考古学遺物の発見事実が記されている。劔岳登頂での錫杖・鉄剣の発見はあまりにも有名で

あるが、その発見の前年にあたる明治39年福井地方に出張中、福井市から約12km離れた吉野の二本松（三等三角点）<sup>14)</sup>において石棺を発見したこと、それ以降、高橋宮内省歴史部主任<sup>15)</sup>が昨年来調査を継続しており、詳細を決定するまでには少なくとも三年間位は要することが記されている。

一方、錫杖・鉄剣については、複数の学者によって鑑定を進めている段階で、様々な意見等があり、正反対の鑑定もあって、未だ確然たる報告ができないことが残念であると記している。この報告文では、人類学者である坪井正五郎<sup>16)</sup>の研究結果を報告している。その鑑定結果は、弘法大師以前のものか、その後のものかについては、後者とされる鑑定結果であるが、その時代は判然としないこと、錫杖と鉄剣は即断できないが同一持ち主であろうと鑑定していることなどを記している。さらに、他の学者による鑑定では、錫杖は千年以前のもので、錫杖と鉄剣は全く異なる持ち主と鑑定されていたことが書かれている。

度重なる考古学遺物の発見者として柴崎測量官の大変さを隠しきれない様子が窺い知れる報告文である。

#### 4. 地方史・伝承の語り部として

柴崎測量官は、1909（明治42）年の東北の三等三角測量に従事していた頃から1914（大正3）年の岐阜県を中心とした三角測量改測を終える頃までの期間にそれぞれ赴いた地域の歴史や伝承などを機関誌に掲載している。

『院内の銀山に就て』<sup>17)</sup>では、柴崎測量官の郷里にある世界有数の中院内銀山の沿革および現況等についてまとめて報告している。この銀山は1889（明治22）～1905（明治38）年までに年生産7.5tを超え日本一位となっていた。1906（明治39）年の坑内火災により大量死者を出した以降は衰退し、昭和初期に一時採掘再開もあったが、1945年（昭和20）年に歴史を終えた<sup>18)</sup>。柴崎測量官は古河鉦山の坑部課課長からの談話と実地見聞からこの報告文をまとめたことを記している。

『「アイヌ」ノ伝説』<sup>19)</sup>は、1913（大正2）年3月に偕行社（1877（明治10）年に陸軍将校の集会所として設立）で開催された三五会講演会で文学博士喜田貞吉<sup>20)</sup>を講師に迎えアイヌ民族の沿革を聞き、測量作業でアイヌの本場である北海道日高の地を訪れるにつき、蝦夷とアイヌの共通性を強調したかったようである。越中と飛騨の国境にある深山や肥後、加賀白山の深山などに残る集落名を例示しながら蝦夷の伝承を記している。

『関ヶ原の古戦場』<sup>21) 22)</sup>は、最も長い報告文であり、三角点踏査に伴って関ヶ原の古戦場を実地見聞する機会があり、まとめたことを記している。関ヶ原の戦いの沿革や経緯に触れるとともに、測量官らしく各大名の陣所となった山と三角点の関係を詳述している。

このような出張先の紀行文を書き残した理由として、その土地の人たちの協力を得るために見聞を深めた結果によるものと考えられる。

#### 5. 「点の記」だけでなく「面の記」も残す

柴崎測量官は、1915（大正4）年4月19日附で北海道への出張命令を受け、千島択捉島の一等三角測量に従事した。

『五月二十三日柴崎芳太郎君択捉通信』<sup>23)</sup>には、五月二十日根宿地の内保村を出発し阿登佐山山麓に幕営しながら二十一日山頂測点に到着したこと、登山以来毎日降雨あるいは降雪が続き、測量作業中は日中といえども手足凍瘃を感じていたこと、山上は残雪が深く地下五六寸以下は全部凍結で鉄石よりなお硬く造標穴掘作業に諸種の手段を講じたことなどが記されている。

『八月一日柴崎芳太郎君択捉通信』<sup>24)</sup>では、択捉島の戸数（565戸）や人口（2413人）に加え、降雪の終日が六月二十日、降雪の終日が五月十八日、降雪の初めが十月二十九日であることを記している。東海岸は西海岸に比べ寒くて濃霧が多く、春期は酷寒で多風、夏期は常に濃霧に蔽われ、7月は濃霧最も多く平均26日、晴天は3、4日であることも記されている。さらに、作業地の単冠湾は本島東海岸の良港で不凍港でもあることを記している。

『千島択捉島ノ近状』<sup>25)</sup>では、八月一日の通信の続きとして記している。紗那港は千島択捉島北西岸の中央にあって択捉島第一の都会であること、西向きの風が常に吹き、湾内は静穏になることは稀で、例年十二月に入れば氷塊が遠く北海より流れ来て湾内に凝結すること五カ月に及ぶことが記されている。

『千島択捉島ノ近状 前号ノ続キ』<sup>26)</sup>では、択捉島は毎年十一月下旬から翌年四月に至り択捉島は結氷のため閉塞となること、鱒、鮭の産額は全産額の8割強を占め、小川および湖沼は概ねその産卵場となり、その季節になれば河水湖水は変色することなどが記されている。また、択捉島は決して極寒不毛の地ではなく、冬季においては流水のため結氷することもあるが、草木も繁茂し家屋の用材および薪炭に欠乏することはなく、ただ沿岸の樹木は海風のため成長を妨げられ矮小していることなどが記している。

以上のように、一等三角測量作業に従事した千島沢捉島では、以降の二等・三等三角測量や地形測量作業が継続的に実施されるため、「点の記」に加えて島内の地誌や気候・気象などを記載した、いわば「面の記」とでも言うべき調査報告文を作成したものと想像される。

## おわりに

子息の柴崎芳博氏が指摘しているように、柴崎測量官は、測量の重要性や三角点維持保全などを訴えていくために機会を捉えては、出張先の学校や青年会などで講演をしていたようである<sup>27)</sup>。『出張地ニ於ケル見聞ニ就テ』にも書いているように、艱難辛苦しながら献身的国家事業を進めていることを広く一般地方人に知らしめる気概を持って処していた測量官の姿などに、100年の時空を超え、測量技術者として学ぶべき点が多いことを改めて感じた。

なお、本稿作成にあたり、数多くの資料の提供を頂きました(社)日本測量協会測量技術センター四国支所長西田文雄氏には厚くお礼申し上げます。📩

## ■参考文献

- 1) 瀬戸島政博(2009):それからの柴崎芳太郎(上)(下), 測量, 第60巻, 第4号(pp.38-40), 第5号(pp.37-40)
- 2) 西田文雄(2007.7):近代の日本測地系を構築した人—陸地測量部杉山正治一, 三和会「三和」, 第36号, pp.1-25
- 3) 参謀本部陸地測量部:三角測量方式草案(1900), 二等三角測量実行法(1915), 三四等三角測量実行法(1915), 一等三角測量実行法(1917)
- 4) 三五会会報:陸地測量部三角科三五会発行の月刊誌, 陸地測量部三角科職員の交誼を保持し知識の交換を図るために発行。  
三交会誌:陸地測量部三交会発行の月刊誌, 陸地測量部の三角科・地形科・製図科の三科の総合的機関誌として発行。
- 5) 富山日報(1907.8):『劔山攀登冒険譚(上)』, 富山日報記事明治40年8月5~6日
- 6) 陸地測量部三五会(1907.10):『雑録』, 三五会会報, 第17号, pp.97-102
- 7) 近藤信行編(1910):「山の旅 明治・大正篇」岩波文庫録 170-2に収録, 柴崎芳太郎:『越中劔岳先登記』, pp.252-257
- 8) 柴崎芳太郎(1908.3):『出張地ニ於ケル見聞ニ就テ』, 三五会会報, 第21号, pp.13-16
- 9) 吉田孫四郎(1910):越中劔岳, 山岳, 5年1号, pp.24-42

- 10) 石崎光瑤氏撮影明治42年撮影
- 11) 柴崎芳太郎(1911):『本誌五年の第一號所載劔嶽登山の記事に就て』, 山岳, 6年1号, pp.178-182
- 12) 山田明(2008.9):柴崎測量官が劔岳に登った日, 測量, 第59巻, 第8号, pp.70-72
- 13) 柴崎芳太郎(1909):『劔山ニテ獲タル錫杖ニ就テノ考證』, 三五会会報, 第33号, pp.53-55
- 14) 国土地理院ホームページ:基準点閲覧システム
- 15) 高橋健自(1871~1929)とされる。高橋健自は、仙台に生まれ、高等師範学校文文学科を卒業後、1904(明治37)年に東京帝室博物館に入り、終生をそこに勤務した(藤田亮策監修・日本考古学協会編(1983):日本考古学辞典, 東京堂出版)。古墳時代から歴史時代にかけての研究を専門とし、劔岳山頂で発見された錫杖に関する短い論文を考古学雑誌(Vol.1, No.7)に発表した。
- 16) 坪井正五郎(1863~1913)は、人類学者・考古学者で1893(明治26)年帝国大学理科大学教授として新設の人類学講座を担当した。日本先住民族がアイヌの伝承中のコロボックルの生活様式と類似するとみなし、コロボックル説を提唱した。火成岩の成因研究の権威である地質学者坪井誠太郎(1893~1986)は正五郎の長男、地球物理学者で日本測地学会坪井賞の名前を残している坪井忠次(1902~1988)は誠太郎の弟である(日本歴史大事典2(小学館, 2000)による)。
- 17) 柴崎芳太郎(1909):『院内の銀山に就て』, 三五会会報, 第36号, pp.108-114
- 18) 渡部和男(2009):院内銀山史, 246p, 無明舎出版
- 19) 柴崎芳太郎(1913):『「アイヌ」ノ伝説』, 三交会誌, 第2号, pp.39-40
- 20) 喜田貞吉(1871~1939)は、1896(明治29)に東大国史学科を卒業、後に東北大学講師として東北古代史の研究に専念する。さらに京都大学に移り、古墳研究を進めた。1905年(明治38)頃、法隆寺再建論を巡って関野貞との論争は有名である((藤田亮策監修・日本考古学協会編(1983):日本考古学辞典, 東京堂出版)。
- 21) 柴崎芳太郎(1914):『関ヶ原の古戦場』, 三交会誌, 第11号, pp.16-19, 第14号, pp.36-42
- 22) 柴崎芳太郎(1915):『関ヶ原の古戦場(続き)』, 三交会誌, 第17号, pp.81-82
- 23) 陸地測量部三交会(1915):『五月二十三日柴崎芳太郎君沢捉通信』, 三交会誌, 第20号, pp.230
- 24) 陸地測量部三交会(1915):『八月一日柴崎芳太郎君沢捉通信』, 三交会誌, 第22号, pp.345-346
- 25) 柴崎芳太郎(1915):『千島沢捉島ノ近状』, 三交会誌, 第25号, pp.477-478
- 26) 柴崎芳太郎(1916):『千島沢捉島ノ近状 前号ノ続キ』, 三交会誌, 第26号, pp.40-41
- 27) 柴崎芳博(1979):一測量官の生涯 柴崎芳太郎伝, 国土地理院広報, 第129号, pp.3-7